

Roman Books



昭和45年12月16日 第1刷発行

戦いすんで
日が暮れて

320 円

著 者	佐 藤 愛 子
発行者	野 間 省 一
発行所	株式会社 講 談 社 東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号 112 振替東京 3 9 3 0 電話東京 (942) 1111 (大代表)
印刷所	豊国印刷株式会社
製本所	有限会社中沢製本

© 佐藤愛子 昭和四十五年

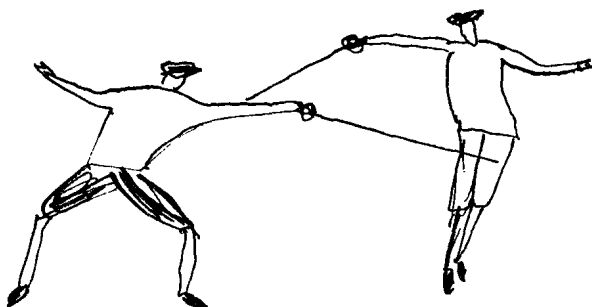
(落丁本・乱丁本はお取り替えいたします)

Printed in Japan

0293-116022-2253 (0) (文1)

戦いすんで日が暮れて

佐藤 愛子



Roman Books

装
幀
風
間
完

目次

戦いすんで日が暮れて……………	五
ひとりぼっちの女史……………	五
敗残の春……………	八七
佐倉夫人の憂愁……………	一三
結婚夜曲……………	一七
マメ勝ち信吉……………	一七
ああ男！……………	一七
田所女史の悲恋……………	二四一

戦いすんで日が暮れて

1

私は桃子とテレビを見ていた。

テレビはどんなものをやっていたのか覚えていない。私は炬燵こたつに脚を入れて横になり、座布団を二つ折にして枕にし、炬燵の外にいる桃子とふざけていた。

目が覚めたときははつきり覚えていた夢が、人に話そうとすると急に光に当てられた映写幕のように色褪あせてすーっと後退し消えてしまう。そんな夢のように私の脳裡には、ただ明るく暖かな茶の間と、ふざけていた桃子との間に流れていた楽しい気分がかすかに残っているだけだ。

多分そのとき、私は例によって、テレビの歌手のしぐさや表情について、いつもの悪口をいっていたと思う。

「なにもあの程度の歌を歌うのに、眉毛上げ下げすることもないと思うけどね」とか、

「よオよオ、塩ダラのおにいさん！」

というようなことを。

桃子は必要以上の大声で笑いこけていた。来る日も来る日も母親が雑文書きの仕事に追われているので、こんなひとときは桃子を興奮させるのだ。

夫が帰ってきたとき、私の顔にも桃子の顔にも、楽しい笑いの名残りがあつたにちがいない。私は茶の間に入って来た夫に向つておかえりなさいと身を起し、笑いの余波を顔に残したまま夫の顔を見て、そして直感した。

夫の顔は赤く、酒を飲んだ男のようにいやな光りかたをし、目のまわりが赤く、そうして今まで見たこともなかったような、子供供した顔になっていた。夫はいつもの彼の坐り場所である炬燵の一边にくずれるように坐りながら、重病人のような溷^かれた声でときれときれにいった。「すまない……会社……つぶれた……」

と同時に夫の異様に赤く光った顔が歪み、こらえきれぬ涙が溢れ出たのを私は見た。

私は自分が何をいったのか覚えていない。桃子が学校から泣きながら帰つて来たときと同じ、叱咤^{しった}するような調子でこんなことをいったことだけは覚えている。

「伊藤さんはどうしたの、伊藤さんは……えっ、どうしたんですか、ウソをいったの？　伊藤さんは……」

その前の日、私は伊藤という金持が、三千万の金を出して会社のテコ入れをしてくれるという話を珍らしくはれやかな顔の夫から聞いたばかりだったのだ。私は自分の心が、冷やかに醒^さ

めて行くのを感じた。私は炬燵の縁に額を置いたまま、黙って動かぬ夫の姿を見ていた。私は何と喋っているのかわからなかった。私は驚いてもいなかったし、悲しんでもいなかった。来るべきときが来た、というような悲愴感もなかった。ただ夫が今まで私に見せたこともないような顔を見せたことに当惑していた。私は桃子を見た。びっくりして、泣いている父親を見ていた桃子は、私を見上げた。私たちの目は合った。私は桃子の目に、ふと、笑いが浮かぶのを見た。桃子は唇をすぼめ、私に向って首をすくめ、笑いをこらえる真似をした。

2

その年の十二月が寒かったのか暖かったのか、何も覚えていない。十二月に入ったのはそれから三日目か四日目だったと思う。私は骨董屋の石田を呼んで家中の絵や焼き物のたぐいを売り払った。といってもこの二、三年の間に我が家の骨董の大部分は値のあるものから順に売り払われ、私がまだあると思っていた物も、

「あれは秋にご主人からお頼まれしまして、もう……」

と石田は既に売却したことを伝えた。

早朝から深夜まで、電話のベルが鳴りつづけた。いろいろな声がいろいろな方で夫の行く先を聞いた。夫が毎日どこで何をしているのか、私には何もわからなかった。夫は深夜、三時か四時になって漸く帰って来るとものもいわずに寝てしまい、朝、七時には起きて家を出て

行ってしまう。

「旦那さまはお出かけになっておられますが……、夜中の三時頃には帰られますけど……」

ツルヨが応答している声が、まるでテープレコーダーのくり返しのように、私の仕事部屋に聞えて来た。

「奥さまはお留守です。さあ……わかりませんけど……」

債権者の電話の合間に、雑誌社やテレビ局からの電話がはさまった。

「亭主を叱る」という座談会なんですがね。ひとつそのう、痛烈なところでやっていただきたいんですよ。いや、それがですねえ。どうしてもその方のオーソリチイであられる瀬木さんを中心にしていただかないと……」

そうかと思うとこういうのもあった。

「マイホーム主義撲滅論者の一人として、賛同派の方たちと大いに論戦していただきたいんですが……」

夜になると私は仕事場を二階の書斎から茶の間に移した。ツルヨが寝てしまうと、電話は私が取らねばならない。私は万年筆を右手に持ったまま、左手で受話器を握っていった。

「申しわけございません。まだ帰りませんのですが……はあ、なにぶんにもご存知のような状態でございまして、あちらこちらと走り廻っておりますものですから……」

——電車の中でミニスカートの前に坐るのが一日のうちで最大のたのしみ、という男性がい

る。そのおたのしみにあまりに一生懸命になりすぎて、電車の座席からすべり落ちたという男性もいる。会社でやたらとペンや鉛筆を机の下に転がす男がいる。前の席にミニスカートが坐っているのである。

女のハギを見て雲から落っこちて来た久米の仙人以来、男が女のモモに弱いというそのえんえんたる歴史を今になって非難してもはじまらぬことぐらいはわかつているが、それにしても激変するこの世相の中で、男性としてのもろもろの伝統を失って来た男性諸氏がただ一つ、女のモモに対する興味だけを失わなかったということとは、まことに哀れとも情けないともいえないのである……

私は書いた。それだけ書くのに三時間かかった。その原稿は新聞の連載随想で、明日の朝にはどうしても渡さねばならぬものだ。電話が鳴った。

「瀬木、帰ってる？」

いきなりいうその声は、私たち夫婦の古くからの友人である作家の片桐だった。

「困っちゃったよ、アキ子さん、瀬木にね、頼まれて五十万余りだけど、貸してるのさ。そうしたら今度のことだろう？ 瀬木から何とかいってくるのを待ってるんだけど、ウンともスウともいって来ないんだよ。何とか挨拶ぐらいしてくれてもいいと思うんだけどね。女房はギャアギャアさわぐし、いや、もうホトホトマイっちゃまってねえ。ぼくはとにかく瀬木を信頼してたんだよ。あの男を好きだしね。そのぼくの友情と信頼がこんな形で裏切られるとは思わなか

ったなア」

片桐は少し酔っている。

「ぼくはね、金のことよりも、そのことがいやだねえ。辛いねえ。わかるだろ？ アキ子さん

……ぼくのこの気持、わかるだろう」

「うーん」

私は唸った。

「わかる……ごめんなさい……」

私はそれしかいえない。

「何とかならないかなあ、困っちゃったんだよ。女房がねえ……わかるだろ、うちの女房のこ
とだから……」

「ごめんなさい。ごめんなさい。何とかするわ。あたしが……何とかお返しします」

電話を切って仕事をつづけようとする、じわじわと怒りが頭を擡もたげて来た。

——信頼……友情……

と私は呟いた。するといきなり胸に火がついた。

——片桐さん、あなたの信頼と友情は金で左右されるものなの？ 私は胸の中で叫んだ。

あなたも作家のハシクレなら、サラリーマンがいうようないいかたで信頼だの友情だのって
言葉を使わないでよ。信頼だの友情だのなんていわないで、「困るじゃないか、金を返してく

れよ」となぜはつきりいわないの。オレは友情よりも五十万円の方が大事だと、なぜはつきりいわないのよ！……

私は片桐の電話番号を何度か廻したが、そのたびに信号音が鳴る前に切った。おそらく私の怒りは理不尽な怒りなのにちがいない。私はそう思った。多分私には片桐に腹を立てる権利などないのだ。私は「信用を裏切った男」の妻なのだ。夫婦して土下座して謝罪すべき人間なのだ。私はそれを知っており、そしてそのことが、そのどうにもならなさが、いつそう私の怒りを煽るのだった。

私がしたことではない。私の夫とそしてあなたがしたことだ！

私はそういいたかった。もし片桐が事前に私に相談してくれば、私は絶対に夫の会社に金を出すなと警告しただろう。

——瀬木作三みたいな男に金を貸すときは当然、それだけの覚悟があつてしかるべきなのに……瀬木も甘いけどあなたも甘いわね。

そうもいってやりたかった。何としてでも五十万の金を作りたい。その札束で片桐の横面をひっぱたいてやる場面を空想した。

「どう、これで友情と信頼はとりもどせた？」

そういつてテレビ漫画の女賊のように高らかに笑い声を響かせてやりたいと思った。

しかし私にはそれをする権利はないのだった。私は夫が会社を経営することに反対しつづけ

た。夫の社長としての月給は五回ほどもらっただけで、それ以外に私は会社の恩恵を受けたことはなかった。そればかりか、社員の月給や落さねばならぬ手形の期日が来るたびに、五十万、百万と、私が働いた金を持ち出された。私が雑文を書いて稼いだ金は、右から左へと消えた。会社のボンクラ経理部長は、まるで当り前のように私に金を借りにやって来た……。だがそんなことをいくら並べ立てても、その事実はどうな力も持たないのだ。私は倒産者の妻で、妻である限りは何をいう権利もないのだ。

私は片桐にかける代りに川田俊吉に電話をかけた。もう十二時を過ぎていたが、かまわずにかけた。川田は片桐や私たちとの共通の友人だった。

「もしもし」

川田の眠そうな声が聞えて来た。流行作家の川田はいつでも眠そうな声を出す。その声を聞くと私はいつも何か激越ないい方をして、彼を仰天させてやりたい気持になるのだ。

「川田さん？ ああ、あたし、もう腹が立って腹が立って……ねえ、何とかしてよ。明日の朝に渡す原稿があるっていうのに……」

「またボンクラ亭主が何かしたのか」

「何かしたのかどころじゃないわ。倒産したのよ」

「倒産？ 会社がつぶれたってこと？」

川田の声は少し緊張して高まった。だがその程度の高まり方では私は不満足だった。

「たいへんなのよ、借金とりに追われて……電話電話で仕事も出来やしない……」

私は大きな声を出した。

「ちよつと、聞いてるの、川田さん！ たよりない返事すると承知しないから……」

「聞いてるよ。聞いてますよ。だがオレは今日は熱があるんだ」

「ネツ？ 何だって熱なんか出してるのよ、贅沢な……」

「手術やったんだよ。パイプカットの復元手術だ」

川田は十年前に妻の病弱が理由で避妊手術をした。ところが最近、彼は妻と別れて年若い恋人と結婚した。その若い妻が異常なまでに子供をほしがっているとかねてから聞いていた。

「やったの？ とうとう……」

「うん。それで今日はあそこが引きつってね。うまくねえんだよ」

「へえ、引きつってるの？」

私は氣勢を殺がれた。

「ああ、人生だわねえ……」

私はがっかりしていった。

「イロイロあらアな、だわ、全く……」

「で、どうなるんだい、会社がつぶれたって……」

「どうなるかわかりやしない。でも、もういいの、静かに寝なさい。引きつってる人に話し